

2017(平成 29)年度  
東京藝術大学 大学院  
音楽研究科 音楽文化学専攻  
博士論文

1930 年代の東京音楽学校における作曲教育と歌曲創作  
——近代日本音楽史観の再構築にむけて——

附録

仲 辻 真 帆

## 附録目次

1. 年表——1930年代の東京音楽学校 .....	3
2. 学友会発行雑誌『音楽』記事一覧——1927～1940（昭和2～15）年 .....	4
2-1. 1927（昭和2）年発行 第7号 .....	4
2-2. 1928（昭和3）年発行 第8号 .....	4
2-3. 1929（昭和4）年発行 第9号 .....	5
2-4. 1930（昭和5）年発行 第10号 .....	5
2-5. 1931（昭和6）年発行 第11号 .....	6
2-6. 1932（昭和7）年発行 第12号 .....	6
2-7. 1933（昭和8）年発行 第13号 .....	7
2-8. 1934（昭和9）年発行 第14号 .....	7
2-9. 1935（昭和10）年発行 第15号 .....	8
2-10. 1936（昭和11）年発行 第16号 .....	8
2-11. 1937（昭和12）年発行 第17号 .....	9
2-12. 1938（昭和13）年発行 第18号 .....	9
2-13. 1939（昭和14）年発行 第19号 .....	10
2-14. 1940（昭和15）年発行 第20号 .....	10

3. 帝国書院発行唱歌集『音楽』 .....	11
3-1. 曲名、作詞者、作曲者一覧 .....	11
3-1-1. 第1巻 .....	11
3-1-2. 第2巻 .....	11
3-1-3. 第3巻 .....	11
3-1-4. 第4巻 .....	12
3-1-5. 第5巻 .....	12
3-2. 編集記録 .....	13
4. 初期卒業生の活動記録 .....	15
4-1. 柏木俊夫（第1期生） .....	15
4-1-1. 年譜 .....	15
4-1-2. 作品表 .....	16
4-2. 渡鏡子（第1期生） .....	18
4-2-1. 年譜 .....	18
4-1-2. 作品表 .....	18
4-3. 長與恵美子（第2期生） .....	22
4-3-1. 年譜 .....	22
4-3-2. 作品表 .....	22

## 1. 年表——1930年代の東京音楽学校<sup>1</sup>

西暦	和暦	月	東京音楽学校関連事項	社会情勢
1930年	昭和5年	1月	予科および本科器楽部に「ダブルベース」「フルート」「その他の管楽器」を追加	
1930年	昭和5年	2月	初の蓄音機レコード吹き込み	
1930年	昭和5年	4月	選科学科目中に生田流箏曲を追加	
1930年	昭和5年	9月	女生徒への洋服着用を許可。外国人教師を4人に増員(翌年には5人となる)	
1931年	昭和6年	2月	定期演奏会が毎年3回に増加(翌年からは4回となる)	
1931年	昭和6年	4月	本科に作曲部を設置	
1931年	昭和6年	9月	—	9月、満州事変
1931年	昭和6年	9月	クラウス・プリングスハイム着任	
1931年	昭和6年	11月	選科学科目に能楽を追加(謡、男生徒のみ)。予科の管楽器専攻志望生を入学許可	
1932年	昭和7年	1月	選科学科目に作曲を追加	
1932年	昭和7年	3月	—	満州国、建国宣言
1932年	昭和7年	5月	思想問題により退学者、停学者を出す	海軍青年将校と陸軍士官学校生徒らが前首相官邸などを襲撃(5・15事件)
1933年	昭和8年	1月	—	ドイツでヒトラー内閣成立
1933年	昭和8年	2月	選科学科目の能楽に仕舞、囃子を追加	
1933年	昭和8年	3月	選科学科目の管楽を追加	日本が国際連盟を脱退
1933年	昭和8年	5月	研究科に管弦楽合奏および合唱を課す	
1933年	昭和8年	6月	東京音楽学校内に上野児童音楽学園設置	
1934年	昭和9年	5月	生徒教員実施で初の野営演習	
1936年	昭和11年	2月	—	皇道派青年将校らが拳兵し永田町一帯を占拠(2・26事件)
1936年	昭和11年	3月	本科作曲部の第一期生が卒業	
1936年	昭和11年	6月	邦楽科を設置	
1936年	昭和11年	11月	—	日独防共協定
1936年	昭和11年	12月	音声研究部規程および細則を制定、施行	
1937年	昭和12年	2月	学生歌を制定	
1937年	昭和12年	3月	本科作曲部の第二期生が卒業	
1937年	昭和12年	7月	—	日中戦争がはじまる
1938年	昭和13年	3月	本科作曲部の第三期生が卒業	
1938年	昭和13年	4月	—	国家総動員法公布、施行
1938年	昭和13年	5月	職員定員改正。教授、助教授増員	
1939年	昭和14年	3月	邦楽科の第1期生および本科作曲部の第四期生が卒業	
1939年	昭和14年	7月	初めて女生徒の合宿訓練実施。9月からは薙刀術および律動運動開始	
1939年	昭和14年	9月	—	第二次世界大戦がはじまる

<sup>1</sup> 年表作成にあたり、次の文献を参考にした。

『近代日本総合年表』第4版(岩波書店、2001年)、『東京音楽学校一覧』(東京音楽学校、1930～39年)、『日本の作曲20世紀』(音楽之友社、1999年)、『日本洋楽外史』(ラジオ技術社、1978年)、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第2巻(音楽之友社、2003年)。

## 2. 学友会発行雑誌『音楽』記事一覧<sup>2</sup>

### 2-1. 1927 (昭和 2) 年発行 第 7 号

ページ	記事種別	タイトル	著者
口絵	なし	東京音楽学校管絃及合唱団(レクイエム演奏中)	なし
なし	なし	組曲「お伽噺」中の第一番「皇子と兵隊との行進曲」	(作曲 橋本國彦)
1	なし	邦楽研究の必要と其方法	弘田龍太郎
7	なし	ことばのひびき	吉田生
18	なし	オルガン、ストップの話	福島琢郎
32	なし	かなしみうた	吉田生
35	なし	芸術について三つのこと	田村範一
50	なし	国民詩についてのかたこと	真澄
53	なし	自問的独白	岡田二郎
58	なし	予の宗教観	K生
64	なし	若い音楽家の言葉	たかき・とうろく
79	なし	ドリマーからドリマーへの手紙	小野崎晋三
85	なし	音楽漫談	竹中重雄
90	なし	紙に曝した感情	五三六
96	なし	宇野浩二論	S・M
101	なし	漫録二三	ひとし
107	なし	若き女性の心	BAN
109	なし	色んなこと	良三
112	なし	小品と随筆	ふみと
118	なし	お菓	かつ子
120	なし	山小屋の日記から	みまこ
124	なし	我が短篇小説	R・T
127	なし	姉弟	真澄
130	なし	夜汽車	滯
144	なし	源吉	さだを
155	なし	幻を追ふ	弓江
173	なし	夢見る人Hの話	きのむら
183	なし	にほひ	ひとし
195	俳句及短歌	我が俳句集より	涼草
196	俳句及短歌	土筆集	一
199	俳句及短歌	野茨さく故里のうた	ひとし
203	俳句及短歌	折々の心	みまこ
204	俳句及短歌	新春雑録	りういう
204	俳句及短歌	思ひ出の中より	春緒
207	詩	ハイネ詩	M. T. Makino
209	詩	道化師	陽
210	詩	手をさしのべて	BANE
211	雑報	理事室より	(記載なし)
211	雑報	演奏部報	(記載なし)
212	雑報	旅行部報	(記載なし)
213	雑報	運動部報	(記載なし)
215	雑報	雑誌部より	(記載なし)

### 2-2. 1927年12月発行 第8号

ページ	記事種別	タイトル	著者
1	評論・随筆・翻訳	音楽伝説	吉田生
10	評論・随筆・翻訳	二人マリアと成らずの北塔	外山
15	評論・随筆・翻訳	鱈	吉田
18	評論・随筆・翻訳	秋光	H・K
24	評論・随筆・翻訳	ベートヴェン(ママ)の七部合奏曲	Y生
25	評論・随筆・翻訳	扇	田良
26	評論・随筆・翻訳	或る女の気持	ひこ
29	評論・随筆・翻訳	裁かるる者の心	ひ
33	評論・随筆・翻訳	或額	みさを
36	短歌	笹舟	節子
38	短歌	秋に寄す	としを
38	短歌	友は嫁ぐ	ひこ
40	短歌	君をしのびて	千枝子
40	短歌	旅より	清美
42	詩	戯れ	百合香
42	詩	夏	節子
44	詩	京の祇園会	ひなぎく
44	詩	詩一篇	美佐緒
45	詩	むなしきおもひ	彌撒
45	詩	長詩	D・K
46	俳句	其折々	其石生
47	小説	平凡なる自殺	とうろく
60	小説	黒猫	いたる
66	小説	光	ひとし
81	小説	社	I・Y

<sup>2</sup> 著者名については、雑誌より転載した。

2-3. 1929年3月発行 第9号（「記事種別」は記載なし）

ページ	タイトル	著者
口絵	皇后陛下御自動車奉迎門御通過	なし
口絵	乗杉新会長	なし
口絵	御前演奏練習中の本校管絃合唱団	なし
なし	御大礼奉祝歌	高野教授
1	巻頭の辞	会長
2	鳴物伝説	吉田生
17	むかしむかし	なにはのみつ
28	談片	乙骨三郎
31	セザール・フランクに就いてのきれぎれ	岡田二郎
36	オルガン漫談	とりゐ生
38	群羊	二路
39	或日の心	昭
40	思ひ出	名無草
41	おこよ	達之助
44	森の月	中村道之助
46	所感	呉泰次郎
47	偶感	二郎生
50	冬閑随想	なほみ
55	蝦夷紀行	すえたけ
65	吾愛する小川ダルニーよ	呉泰次郎
67	手紙	きみ
72	雪の香、土の香	津軽山人
76	こころ	としを
77	雑詠	暁
77	故里の夏	秋男
80	をりをりに	やまびこ
81	古き丘にて	中村道之助
84	どうでも	糸竹棒
88	私の格言集より	呉泰次郎
97	亡きK	暁
101	唄	中村道之助
102	日記の一節	呉泰次郎
104	新入生の会話	満寿美
107	日記から	K. T
112	あるくりごと	青光
116	私の「芸術論」の一節より	呉泰次郎
124	休はつる頃	於矢治
124	雑詠	きみ
125	霧	きくえ
126	わびしきは	K. M
127	海辺にて	T生
129	幻想	YYKC
(巻末)	雑録 甲報、理事室より、演奏部報、旅行部だより、運動部だより、雑誌部だより	なし

2-4. 1930年3月発行 第10号（「記事種別」は記載なし）

ページ	タイトル	著者
なし	Alla Mazurka	(作曲)長谷川良夫
2	巻頭辞	乗杉会長
4	将来の日本楽	リーベルゾン博士(寄)、乙骨三郎訳
11	古寺想楽	吉田生
27	シュペルトの「魔王」演奏手引	マ・ネトケ・レーヴェ、乙骨三郎訳
31	アベネック時代のバリ音楽院管絃団	ア・カアス、長谷川良夫訳
37	通像楽器の音楽的貢献	中村道之助
41	秋思断章	奥山謙一郎
61	雑詠	きくえ
62	歩む	田鶴子
64	或山守爺さんのお話	二九四 二 三一四
68	淡路紀行	沙魚
78	うた	田鶴子
80	女	重吉
84	蛙の寝言	満寿美
87	Aを知る	白光
89	夏の断片(甲斐の巻)	きみ
92	鬨の芸術	越谷達之助
104	夏陽	丘秋
106	禅昌寺満吟	夜半
107	変移	中村道之助
113	病床にて	ふね子
116	短詩十題	平田忠
116	ある自画像	山縣茂太郎
117	詩	きみ
119	故里の夏つづき	夜半
120	運命の子は歌ふ	芙蓉

2-5. 1930年10月発行 第11号 (「記事種別」は記載なし)

ページ	タイトル	著者
なし	表紙	嵯峨天皇宸筆
1	御錠	(記載なし)
2	巻頭辞	乗杉会長
4	進講私記	高野辰之
10	音楽教育家としての伊澤先生小伝	(記載なし)
11	伊澤初代校長胸像除幕式次第	(記載なし)
17	亜米利加瞥見記	加納道生
33	おもひで、その他	近藤忠義
43	財団法人教育楽器調正会の設立	福島琢郎
51	東洋音楽の世界文化に及ぼせる影響	田辺尚雄氏講演
61	昭和四年度卒業生送別会に於て	(記載なし)
65	佐藤美子君より乗杉校長宛の私信	(記載なし)
69	千葉演奏遠足記	(記載なし)
1~19	シュテールの転調法の紹介	長谷川良夫
73	ワグネルの「芸術と革命」を読みて	斎藤次郎
81	心	竹中重雄
83	薄暗き脚	越谷達之助
84	暑中休暇合宿記	河童連中
104	郷土紹介の二、三	添川ハナ
109	南蛮と唐土の音楽についての研究	長崎三郎
109	我没頭	斎藤次郎
129	日本音楽漫想	竹中重雄
134	放浪歎	死迷地一線
143	摘草	香草居清賀
145	囚人	三吉
147	放火犯	小島喜久寿
159	雑録	(記載なし)

2-6. 1931年3月発行 第12号 (「記事種別」は記載なし)

ページ	タイトル	著者
なし	表紙	嵯峨天皇宸筆
なし	作曲 一、子守唄	長谷川良夫
なし	作曲 二、プレリユード	永谷義輝
なし	作曲 三、ニツのムーヴマン	山縣茂太郎
2	巻頭辞	会長 乗杉嘉壽
4	所謂日本国民楽についての小考(子守唄作曲に関連して)	長谷川良夫
8	遠き友	近藤忠義
14	うたぐづ	近藤忠義
16	郷愁	いちろう
21	浅草(その他)	竹中重雄
22	晩秋の朝(その他)	IK
24	詩三題	勿汚美
28	亡き友	小池寿郷
32	随分考えたがよい題がない話	白輪白太郎
34	「我没頭」より	サイトウ
47	ジャジャントコゲ	蘭
50	変言出没	平井保喜
53	AとSのこと	S. G生
57	涙	小池寿郷
64	つれづれ草	石本左千夫
73	演奏旅行記 土浦、水戸、仙台、京都、名古屋	(記載なし)
87	為になりつるクラス会	酢蛸
90	演奏部報	演奏部
93	運動部報	織田
94	編輯後記	なし

2-7. 1932年3月発行 第13号 (「記事種別」は記載なし)

ページ	タイトル	著者
1	はしがき	太田太郎
5	乗杉校長帰朝訓示	(乗杉嘉壽)
37	マーラーに就いての断片 一、漢堡よりブルックナーに与へた書簡 二、創作に於けるマーラー 三、第二交響楽の完成に於ける彼 四、維納のオペラ指揮者としてのマーラー 五、指揮者としてのマーラー	呉泰次郎訳
41	ブゾーニの言葉 一、如何にして私は作曲するか 二、ピアニストに対する要望に就て 三、ピアノフォルテを尊重せよ 四、新しい和声法 五、クロマティッシュファンタジーとフーゲ	宮内鎮代子訳
47	巴里国立音楽学校一千九百三十一年度の試験に就いて	佐藤美子
49	日本に於ける独逸音楽の勝利	なし
51	演奏部報	なし
57	運動部報 一、富士五胡巡り 二、明治神宮体育大会射撃に出場 三、庭球戦 四、対武蔵野野球戦其他	なし
なし	会計報告	なし
横組1	「バッハ平均律ピアノ曲集」解剖	なし
横組85	ペダルの用法(リンド)	北野健次訳
横組116	リードの巨匠シューベルト(ミース)	添川はな訳
附録	プリングスハイム作曲 Frauenhand(ピアノ伴奏及総譜)	なし

2-8. 1934年3月発行 第14号

ページ	資料種別	タイトル	著者
1	講座	音声学	講師 蛭田琴次
38	講座	プラスバンドに就て	内藤清五
56	なし	史的に観たる楽器の意義	教授 太田太郎
65	なし	モツアルトのピアノ・ソナタ再研究	本二 山田和男
90	なし	混沌と機械の間	アドルフ・ワイスマン/本一 渡鏡子訳
97	なし	ブゾーニの言葉 一、いささか楽器編成法に就て 二、暗譜演奏に就て 三、一流芸術家的——アルフルギスナハトより。フォンイノースブーエフ。 四、芸術とテクニク	フェルツイオ・ブゾーニ/宮内鎮代子訳
109	なし	指揮者の変遷	ヘンダーソン/呉泰次郎訳
119	なし	虚無僧さんからお釣を貰った話	本一 村尾護郎
126	なし	音楽学校を中心とする古き上野の物語	教授 馨寿夫
144	なし	地方通信	なし
146	部報	演奏部報告	なし
155	部報	雑誌部報告	なし
156	部報	旅行部報告	なし
174	部報	運動部報告	なし
177	部報	会計報告	なし
181	なし	編輯後記	なし
横組1	なし	バッハ平均律ピアノ曲集解剖	フーゴー・リーマン/黒澤愛子、横山田鶴、遠見豊子、池田文子、今井治郎訳



2-9. 1935年3月発行 第15号

ページ	記事種別	タイトル	著者
1	なし	巻頭辞	会長 乗杉嘉壽
3	なし	勸題 謡曲 池辺鶴	教授 高野辰之
4	なし	南蛮楽器チャルメラ考	部長 遠藤宏
8	なし	「音楽上の生活規範」より	本三 シューマン／松尾千代子
14	なし	たはこと	師二 梅澤信一
16	なし	音楽覚書	師二 網代栄三
35	なし	音楽学校を中心とする古き上野の物語	教授 馨寿夫
56	なし	乙骨先生の遺著「音楽史」	元教授 太田太郎
60	なし	乙骨先生の思ひ出	教授 澤崎定之
62	なし	恩師乙骨三郎先生を偲びて	予科 津久井昇
64	創作	北海道雑詠	本二 太田静
64	創作	光と影	師三 鈴木久四郎
64	創作	あこがれ	師三 鈴木久四郎
65	創作	小曲	本二 黒羽亘
66	創作	詩	本一 石渡日出夫
70	創作	火事を発見して笑はれた話	予科 森一也
73	創作	我が心	予科 森一也
73	創作	故郷離れて	予科 森一也
74	創作	都会の黄昏	予科 森一也
75	創作	通り雨	予科 森一也
76	学校記事	皇后陛下御啓、創立記念日、シュトラウス誕生七十年祝賀会日独交歓放送、日比谷音楽会、躍進日本	なし
86	部報	演奏部報告	なし
92	部報	雑誌部報告	なし
92	部報	旅行部報告	なし
109	部報	運動部報告	なし
111	部報	会計報告	なし
112	クラス消息	本科、予科、師範科	なし
121	なし	音声学	颯田琴次
158	なし	熊谷秋男遺稿	なし

2-10. 1935年12月発行 第16号

ページ	記事種別	タイトル	著者
1	なし	巻頭の辞	会長 乗杉嘉壽
2	なし	音楽古書を漁る(一)	部長 遠藤宏
13	なし	東洋音楽の起源	アルフレ・ウエスタール／渡鏡子訳
29	なし	アイヌ音楽に就て	師一 笹谷栄一朗
34	なし	音楽学校を中心とする古き上野の物語(三)	教授 馨寿夫
44	なし	続音楽覚書	師三 網代栄三
55	創作	阿呆のたはこと	師二 北原雄一
62	創作	東北点描	師三 梅澤信一
69	創作	房州でペラを釣る	本二 田村五郎
71	創作	思ふまま	予科 菊池てい
78	創作	青い眼をした日本人	本一 森一也
84	歌	〇・反歌	師二 北原雄一
84	歌	椎の美	秋海藻
85	歌	峡・海	師二 永井重徳
99	詩	若き日	師三 中村一郎
101	詩	人間の足音を聞く	師三 網代栄三
104	詩	習作	師二 青木謙郎
106	詩	アドバルーン	師一 鈴木邦弘
108	詩	影三連(六編)	師二 山下正
114	詩	冬に題する二片	本二 森一也
116	詩	帰り道	本二 江古田歌馬鹿
117	詩	労きし鶉(五編)	梧葉
120	詩	英詩紹介(六編)	師二 鈴木邦弘
131	部報	演奏部報	なし
136	演奏旅行記	新潟演奏旅行記	なし
143	演奏旅行記	中国九州	なし
143	演奏旅行記	先づ鳥取へ	なし
145	演奏旅行記	鳥取―松江	なし
146	演奏旅行記	松江より山口へ	なし
147	演奏旅行記	博多	なし
148	演奏旅行記	長崎の記	なし
150	演奏旅行記	佐賀より熊本へ	なし
151	演奏旅行記	熊本の記	なし
152	演奏旅行記	阿蘇遠征記	なし
154	演奏旅行記	熊本―別府の記	なし
156	演奏旅行記	帰途に就く	なし
159	部報	運動部報	なし
169	なし	クラス消息	なし
178	特別寄稿	音声学	颯田琴次
194	特別寄稿	東京音楽学校の管弦楽及びその使命	クラウス・プリングスハイム
なし	なし	編輯後記	なし

## 2-11. 1937年3月発行 第17号

ページ	記事種別	タイトル	著者
口絵	なし	なし	なし
扉	なし	なし	なし
2	なし	巻頭の辞	会長 乗杉嘉壽
4	研究・論説	十八世紀に於ける和声学書	遠藤宏
14	研究・論説	新しい音楽の語法	ハンス・メルスマン／渡鏡子訳
18	研究・論説	日本的なるものに就いて	風巻景次郎
25	研究・論説	われわれにひきあげられるもの	山田和男
32	研究・論説	「日本的」及日本的作曲に就て	今井慶明
36	研究・論説	アウス・マイネム・ターゲブッフ	安部幸明
38	研究・論説	東方音楽への断想	丸山和雄
52	研究・論説	貴重音盤蒐集大系	森一也
62	研究・論説	徒然草の矛盾	原繁義
66	創作・随筆	ペンペン草抄	長與恵美子
68	創作・随筆	偶感・手紙	山下正
70	創作・随筆	夜の反省	K. K
74	創作・随筆	或若者の日記	石桁真礼生
76	創作・随筆	妹弟	南部享
80	創作・随筆	思ふままに・茉莉	鈴木正夫
83	創作・随筆	ワルツ放送記	岸かほる
85	創作・随筆	静聴	大石昇
86	創作・随筆	思索の山	原繁義
88	創作・随筆	このごろ	菊池てい
96	創作・随筆	感想	伊達純
98	詩歌	紅山茶花	江口翠
99	詩歌	ともしび	山下正
104	詩歌	桜餅	田村五郎
107	詩歌	「秋の譜」六題	多嬰粟

## 2-12. 1937年10月発行 第18号

ページ	記事種別	タイトル	著者
口絵	なし	第百回記念演奏会 クラウス・プリングスハイム先生	なし
2	なし	銃後に於ける我等の覚悟	会長 乗杉嘉壽
7	なし	東京音楽学校学生歌	なし
10	なし	学友会発会当時	部長 遠藤宏
18	なし	伝統について	風巻景次郎
22	なし	学生諸君への別辞	クラウス・プリングスハイム
31	なし	プリングスハイム先生を送るに際して	今井、清田
33	なし	私の信ずる我等の進路	安部幸明
36	なし	ぐうかん抄	山田和男
43	論説	詩人の恋に就いての私見	本三 柴田睦陸
71	論説	演奏家としての立場から	本三 外狩伸一
77	論説	作品に対する演奏家の態度	本三 清田金吾
85	研究	ピアノソナタを通して見たるベートーヴェンの性格	本三 今井慶明
89	研究	デカンショを尋ねて	本二 酒井弘
95	研究	伝統への模索	本二 丸山和雄
108	研究	ひまつぶし	本二 鈴木正三
113	研究	浩造兄へ	予科 K. N
115	文芸	「残骸」	佚儒
131	文芸	詩	多嬰粟
133	文芸	信濃追分より	今井慶明
134	文芸	歩いた跡	青山まさ
142	文芸	流れ藻	森瑤子
143	文芸	秋に	井上フミ
146	文芸	テンプルちゃんと銀座をノスの記	森一也
155	文芸	ふるさと	笠井治子
159	文芸	雑詠	櫻本正
160	文芸	私のふるさと花輪町	福岡綾子
163	文芸	五つの素描	石井悠紀子
168	文芸	祈り	音狂詩人
170	文芸	四季の歌	横笛
173	文芸	空虚な秋の心境	原繁義
174	文芸	秋の庭で	菊池てい
184	文芸	牛・生命なき歌	柳橋久
190	文芸	山の歌其の他	児谷野康子
192	文芸	道	松井三郎
197	文芸	夏休みのおみやげ	堀田雛子
207	なし	第百回記念演奏会を省みて	柴田睦陸
214	なし	クラス消息	なし
225	なし	戦地だより	なし
235	グラフ	保田の記	なし
239	部報	演奏部、雑誌部、運動部、会計	なし
248	なし	編輯後記	なし

## 2-13. 1939年12月発行 第19号

ページ	記事種別	タイトル	著者
1	なし	創立記念式に於ける訓示	会長 乗杉嘉壽
4	なし	音楽史話(四篇)	部長 遠藤宏
13	論文	初等教育に於ける教育私観	原繁義
28	論文	芸術的趣味から見た隅田川	服部栄次
34	研究	現代ドイツに於ける音楽美学の方向	清田金吾
48	研究	「冬の旅」断片	津田豊子
51	研究	アンサンブル演奏の技巧(ブッシュ談)	鈴木正三訳
横組	研究	バッハ平均律ピアノ曲解剖(リーマン著)	野村幸子訳
57	研究	絃楽器に於ける音程の問題	渡邊暁雄
63	研究	ライマー・ギーゼキングの新ピアノ奏法	左右田五十鈴
72	研究	応召諸氏の動静と音信(四篇)	なし
81	カメラ	野外演習記	なし
86	カメラ	旅行記	なし
92	文芸	吾が心の手帖より	石井悠紀子
97	文芸	折にふれて	児矢野康子
99	文芸	共鳴	松井三雄
107	文芸	散文詩	柳橋久
109	文芸	偶感	友利明長
110	文芸	キャンプ行 他五篇	安斎要一
113	文芸	窓辺	N. K
115	クラス消息		なし
125	部報		なし
なし	編輯後記	目次カット バッハ筆コラール	なし

## 2-14. 1940年1月発行 第20号

ページ	記事種別	タイトル	著者
1	なし	創立六十周年記念式に於ける学校長式辞	なし
2	なし	創立六十周年記念式に於ける文部大臣式辞	なし
5	なし	音楽取調掛最初の演奏会史料	部長 遠藤宏
21	なし	芸に対する心構	教授 杵屋六左衛門
23	論説・研究	音楽の勉強(エルマン談)	研一 鈴木正三訳
30	論説・研究	教育音楽の本質より見たる目的観と師範科生徒の使命	師一 隅田正明
37	論説・研究	シューマン論	本二 赤松稔
42	論説・研究	美と芸術の或る思考過程	師三 松井三雄
50	論説・研究	ライマー・ギーゼキングによる新ピアノ奏法	本三 左右田五十鈴訳
横組	論説・研究	バッハ平均律ピアノ曲解剖(リーマン談)	研一 野村幸子訳
60	文芸	友に送りし詩	服部栄次
62	文芸	短歌"野叫び"外二題	安斎要一
65	文芸	詩"征空者"	安斎要一
67	文芸	満州で拾った印象	草野剛
70	文芸	夏	N. K
74	文芸	南が北を廻る	森脇憲蔵
81	文芸	キヤムプ便り	T. M生
85	特別寄稿	学友会演奏会と私	会友 福田回三郎
88	なし	クラス消息	なし
なし	なし	グラフ・旅のアルバムより	なし
101	一年の回顧	応召の学友と凱旋の学友 其の後の動静	なし
104	なし	勤労報国隊だより	なし
106	なし	保田合宿日記	なし
110	なし	軽井沢演習記	なし
115	なし	創立六十周年記念式並行事	なし
117	なし	追悼欄	なし
118	なし	演奏旅行記 日程・曲目、旅行記、演奏会の感想	なし
134	なし	部報にかへて	なし
142	なし	学友会演奏会プログラム	なし
152	なし	編輯後記	なし

### 3. 帝国書院発行 歌曲集『音楽』

#### 3-1. 曲名・作詞者・作曲者一覧

##### 3-1-1. 第1巻

曲名	作歌者	作曲者
向ふ岸	佐藤一英	岡野貞一
山のふるさと	田中冬二	宮原禎次
湖国の春	飯田亀代司	細川碧
春の雨	伊藤小虎	下總皖一
囀り	三木露風	小松耕輔
南の風の	北原白秋	澤崎定之
菫	風巻景次郎	橋本國彦
逝く春	飯田亀代司	下總皖一
たんぼ	西條八十	信時潔
野菜畑	風巻景次郎	橋本國彦
泊り舟	高橋郁	下總皖一
通草の花	飯田亀代司	林松木
雲雀	三木露風	木下保
都会のうた	風巻景次郎	下總皖一
七つの卵	飯田亀代司	岡野貞一
遠足	土岐善麿	吳泰次郎
お日様が見つけたもの	佐藤一英	岡野貞一
山百合	河井醉茗	細川碧
燕と時計	西條八十	下總皖一
初秋	村野四郎	柏木俊夫
祭	江南文三	西川潤一
雁	江南文三	長與惠美子
雲の秋	伊藤小虎	岡野貞一
夜明け鳥	野口雨情	平井保喜
日本の秋	前田鉄之助	成田為三
白ばら	富原薫	細川碧
春霞	藤原・よみ人しらず	平井保喜
なつかしの故郷	福田正夫	橋本國彦
幼き日	柳澤健	兎東龍夫
晩秋	三木露風	成田為三
たき火	葛原茜	梁田貞
足の跡	林柳波	下總皖一
ふるさとの海	長田恒雄	小松耕輔
雪の宵	吉屋信子	長谷川良夫
初春の海	佐藤惣之助	安部幸明
寒雀	川路柳虹	吳泰次郎
冬	千家元麿	細川碧
初午	飯田亀代司	下總皖一
祖国の精神	藤村作	長谷川良夫
彼岸まゐり	長田幹彦	西川潤一
国旗掲揚の歌	乗杉嘉壽	下總皖一
日本青年の歌	乗杉嘉壽	橋本國彦
蛍の光	小学唱歌集	下總皖一編

##### 3-1-2. 第2巻

曲名	作歌者	作曲者
春の日	西條八十	澤崎定之
今さら	式子内親王	鳥居ツナ
ほのぼのと	後鳥羽天皇	鳥居ツナ
山里の	能因法師	鳥居ツナ
春の野に	良寛	細川碧
桜	風巻景次郎	細川碧
潮音	島崎藤村	平井保喜
朧月三題	久保田宵二	山田和男
夕焼	野口雨情	岡野貞一
音信	長田恒雄	平井保喜
てんとうむし	長田恒雄	長與惠美子
春過ぎて	持統天皇	渡鏡子
紫煙る	飯田亀代司	岡野貞一
小川の歌	深尾須磨子	宮原禎次
少女の歌	佐藤一英	清水脩
山登りの歌	伊藤小虎	橋本國彦
朝の路	千家元麿	橋本國彦
静かなる我が家	三木露風	山田和男
さくらんぼう	クリスティナ・ロセッティ、西條八十	長與惠美子
海水浴	堀口大学	橋本國彦
海雀	北原白秋	草川信
虫壳	伊良子清白	藤井清水
曙光	西條八十	下總皖一
月よみの	良寛	宮原禎次
朝戸出の歌	福田正夫	兎東龍夫
菊	白鳥省吾	山田和男
はらはらと	太田垣蓮月	宮原禎次
雨の夕	三木露風	草川信
時雨の頃	飯田亀代司	木下保
落穂ひろひ	北原白秋	片山頼太郎
山茶花咲く日	飯田亀代司	宮原禎次
日本讃歌	土岐善麿	成田為三
冬木立	林柳波	成田為三
田舎の春	与謝野晶子	岡野貞一
海の雲	正木つや子	下總皖一
国民の歌	北原白秋	吳泰次郎
スキイ	春山行夫	山田和男
珊瑚樹	北原白秋	安部幸明
雪の上の鴉	与謝野晶子	岡野貞一
早春	北原白秋	林松木
国旗掲揚の歌	乗杉嘉壽	下總皖一
日本青年の歌	乗杉嘉壽	橋本國彦
蛍の光	小学唱歌集	下總皖一編

##### 3-1-3. 第3巻

曲名	作歌者	作曲者
天日	明治天皇	細川碧
明治天皇頌歌	北原白秋	兎東龍夫
桜	飯田亀代司	長與惠美子
春の野に	大伴家持	下總皖一
うらうらと	賀茂真淵	松本民之助
春	バルシュ、上田敏	岡田二郎
春のけはひ	長田恒雄	林松木
野の幸	正木つや子	細川碧
小諸なる古城のほとり	島崎藤村	片山頼太郎
清き気を吸へ	高野辰之	弘田龍太郎
小鳥の歌	深尾須磨子	橋本國彦
燕	白鳥省吾	松本民之助
夕月夜	藤原秀能	細川碧
少女よ常に若く	北原白秋	下總皖一
渚の砂文字	福田正夫	吳泰次郎
白鷺	北原白秋	宮城道雄
極熱の	柳原白蓮	細川碧
旅の歌	大谷智子	下總皖一
山の湖	長田恒雄	西川潤一
白珠	北原白秋	長谷川良夫
航空路	河井醉茗	下總皖一
アルバム	水町京子	渡鏡子
ある日のねがひ	柳原白蓮	細川碧
をとめ等よ歌ふべし	佐藤春夫	宮原禎次
天の原	安部仲麻呂	山田和男
秋の通信	勝承夫	渡鏡子
秋の雨	春山行夫	長谷川良夫
名残の柿	飯田亀代司	平井保喜
三保の松原	長田恒雄	草川信
日本新女性の歌	与謝野晶子	渡鏡子
枯野にて	林柳波	足羽章
雪原の歌	百田宗治	安部幸明
早春	飯田亀代司	林松木
桃の節句	勝承夫	長谷川良夫
大日本	飯田亀代司	下總皖一
国旗掲揚の歌	乗杉嘉壽	下總皖一
日本青年の歌	乗杉嘉壽	橋本國彦
蛍の光	小学唱歌集	下總皖一編

## 3-1-4. 第4巻

曲名	作歌者	作曲者
風前鳥	明治天皇	下總皖一
青丹よし	小野老・海犬養岡麻呂	細川碧
花の徳	佐藤春夫	藤井清水
大和路	佐藤一英	細川碧
牧場の春	飯田亀代司	細川碧
花鎮め	河井醉茗	弘田龍太郎
惜春	風巻景次郎	細川碧
法悦の旅	大谷智子	橋本國彦
鐘の春	ヴェルレーヌ・永井荷風	細川碧
母を頌ふ	西條八十	下總皖一
犬と雲	西條八十	橋本國彦
散歩道	水町京子	下總皖一
岸根のいばら	木下幸文	柏木俊夫
泉石	北原白秋	岡田二郎
かもめ	吉屋信子	細川碧
オホツクの海にて	百田宗治	吳泰次郎
落葉松	北原白秋	細川碧
弓	与謝野晶子	信時潔
自然の姿	高野辰之	片山穎太郎
馬の鈴	石井直三郎	藤井清水
望郷の歌	勝承夫	山田和男
山の宿り	田中冬二	草川信
湖上の鳩	石井直三郎	信時潔
おほうみ	源実朝・よみ人知らず	安部幸明
落葉	西條八十	橋本國彦
すめろぎに	佐久良東雄	橋本國彦
ふるさとの橋	百田宗治	岡野貞一
明星の歌	前田鉄之助	兎束龍夫
水仙の花	月原橙一郎	宮原禎次
祈	三木露風	下總皖一
冬山	長田恒雄	安部幸明
春待つ少女らの頌	吉田一穂	信時潔
まなびやの庭に	正富汪洋	岡野貞一
国旗掲揚の歌	乗杉嘉壽	下總皖一
日本青年の歌	乗杉嘉壽	橋本國彦
揚げば尊し	小学唱歌集	下總皖一編

## 3-1-5. 第5巻

曲名	作歌者	作曲者
夜思花・春暁月	明治天皇	橋本國彦
うてや鼓	島崎藤村	宮城道雄
つくしんぼ	西條八十	橋本國彦
春うつる	風巻景次郎	下總皖一
ものいふ葦	佐藤春夫	弘田龍太郎
淡海の海	柿本人麻呂・山部赤人	下總皖一
若葉	千家元麿	橋本國彦
ひんがしの	柿本人麻呂	長谷川良夫
水辺合唱	吉田一穂	下總皖一
秋風の歌	伊藤小虎	橋本國彦
鐘よ鳴れ	江南文三	片山穎太郎
芦の花	江南文三	信時潔
落葉	ヴェルレーヌ・上田敏	林松木
旅の日の山寺	久保田宵二	細川碧
柊の歌	深尾須磨子	井口基成
わが大空	高村光太郎	松本民之助
山のあなた	ブッセ・上田敏	下總皖一
象徴	風巻景次郎	細川碧
国旗掲揚の歌	乗杉嘉壽	下總皖一
日本青年の歌	乗杉嘉壽	橋本國彦
揚げば尊し	小学唱歌集	下總皖一編

### 3-2. 『音楽』編集記録

日付	協議事項	備考
2月27日	毎週1回（火曜日）に委員会を開催することなど諸事承合	「第1回委員会」と記載あり。委員は下總皖一、細川碧、風巻景次郎、馨寿夫、妹尾幹、吉田辰雄。橋本國彦も委員に追記されている。
3月2日	各学年別の歌曲配当と参考資料として収集する文献を確認	「第2回委員会」と記載あり。
3月9日	歌詞選択のために収集する文献を確認	「第3回委員会」と記載あり。
3月16日	国文教科書から歌詞を選択し、参考資料として収集する文献を確認	「第4回委員会」と記載あり。
3月23日	詩集から歌詞を選択、修身、歴史、国語の教科書を参照し題材を検討	「第5回委員会」と記載あり。
3月30日	歌詞の選択、決定	「第6回委員会」と記載あり。
4月5日	歌詞の選択、決定	「第7回委員会」と記載あり。
4月9日	歌詞の選択、決定	「第8回委員会」と記載あり。
4月12日	選択した歌詞の検討と学年別配当決め	「第9回委員会」と記載あり。橋本國彦が加わる。
4月19日	選択した歌詞の学年別配当決め	「第10回委員会」と記載あり。橋本國彦は欠席。
4月26日	各学年の学期別配当決め	「第11回委員会」と記載あり。
4月29日	依頼者、著作権、謝礼、予算について協議	「第12回委員会」と記載あり。「別紙の通り」とあるが資料は所在不明。
5月4日	作曲作歌依頼数振り当て、転載依頼、新作題名について協議	「第13回委員会」と記載あり。「別紙の通り」とあるが資料は所在不明。
5月11日	作歌作曲依頼の決定	「第14回委員会」と記載あり。
5月18日	歌詞、学年配当、作曲依頼者の決定	「第15回委員会」と記載あり。
5月22日	作歌依頼訪問	馨寿夫、妹尾幹、吉田辰雄がそれぞれ手分けして午後6時に帰って報告。午後7時散会。
5月25日（火曜）	歌詞、曲譜の選択配列にかんして協議。方針を決定	「指導精神」「歌詞」「作曲」「題材」各項目ごとに創作方針をまとめる。
5月28日（土曜）	作歌依頼追加	
5月29日（日曜）	作歌依頼訪問	
5月31日（月曜）	作歌依頼追加	福田正夫の推薦による。
6月1日（火曜）	転載作歌依頼追加、学年配当を決定	
6月8日	作曲依頼追加決定	
6月12日	歌詞の検討、選択	風巻景次郎、馨寿夫、妹尾幹、吉田辰雄が出席。
6月15日	作曲依頼決定	
6月19日	作歌作曲依頼の数を表にまとめて提示	
6月22日	新作歌作曲受理	
6月24日	新作歌作曲受理	
6月28日	新作歌作曲受理	
6月29日	作歌作曲依頼、学年配当決定	午前11時～午後1時、午後3時～午後5時半

6月30日	新作歌作曲受理	
7月1日	新作歌作曲受理	
7月2日	転載作歌と新作歌（追加分）の作曲依頼状を発送	
7月5日	新作歌受理	
7月6日	新作歌の作曲依頼と学年配当決定	
7月10日	新作歌受理	
7月14日	新作歌の作曲依頼と学年配当決定	
7月15日	新作歌受理	
7月19日	新作歌新作曲受理	
7月20日	新作歌、作曲依頼	風巻景次郎は欠席。
7月24日	新作曲受理	
7月27日	各学年別配当表を整理（風巻による）	講習のため橋本國彦は欠席。「別紙の通り」とあるが、資料は所在不明。
7月29日	新作曲受理	
8月7日	新作歌、転載作歌の謝礼を送付	「別紙の通り」とあるが、資料は所在不明。
8月16日	新作曲受理	
8月17日	新作曲受理	
8月24日	新作曲受理	
8月25日	新作曲の謝礼を送付	「別紙の通り」とあるが、資料は所在不明。
8月31日	新作曲受理	
9月1日	（受理？）	
9月3日	作歌作曲依頼の最後の督促状（9月15日期限）21通送付。	
9月4日	新作曲受理	
9月11日	新作曲受理	
9月13日	新作曲受理	
9月14日	新作曲受理。追加依頼作曲（第2期）の学年配当、受理作曲の写譜（西川）、歌詞清書（清水）	西川潤一、清水脩も参加。
9月16日	新作曲受理。追加依頼作曲（第2期）の謝礼送付	「別紙の通り」とあるが、資料は所在不明。
9月21日	新作曲受理。追加依頼作曲（第2期）の学年配当、写譜15曲と歌詞清書108篇完了。	西川潤一、清水脩も参加。
9月22日	楽譜浄書の打ち合わせ。	守屋美智雄と楽譜浄書所の三谷熊次が来校。下總皖一、馨寿夫、吉田辰雄が出席。
9月24日	短歌24篇浄書完了（風巻）。最後の学年配当作成。	
9月25日	新作曲受理。版下見本完成。教科書の大きさについて協議。四六版菊版の中間の大きさにすることを決定	守屋美智雄、三谷熊次来校。馨寿夫、妹尾幹、吉田辰雄が出席。
9月27日	新作曲受理	
9月28日	最終的な学年配当決定。新たに15曲の作歌作曲依頼を決定。新作曲受理	西川潤一、清水脩、守屋美智雄、三谷熊次も参加。
9月30日	新作曲受理	

#### 4. 初期卒業生の活動記録

##### 4-1. 柏木俊夫（第1期生）

##### 4-1-1. 年譜<sup>3</sup>

西暦	元号	事項
1912	大正1	9月24日、兵庫に生まれる。
1932	昭和7	東京音楽学校予科に入学。信時潔、プリングスハイム（作曲）、片山穎太郎（和声学・対位法）、高折宮次、福井直俊（ピアノ）に師事。
1936	昭和11	東京音楽学校本科作曲部を第一期生として卒業。卒業演奏の作品は、《知らぬ旅路に夜は来りて》。4月、研究科に進む。
1937	昭和12	第二東京市立中学校講師となる。12月、『音楽』全5巻（乗杉嘉壽編）帝国書院より発行。《初秋》《岸根のいばら》が収録される。
1938	昭和13	東京音楽学校研究科作曲部修了。引き続き同校で聴講し指揮を学ぶ。
1943	昭和18	早稲田大学文学部非常勤講師。
1945	昭和20	結婚。空襲で家財焼失。岡山に疎開。
1947	昭和22	信時潔宅に寄寓。都立上野中学に復職。
1951	昭和26	《奥の細道》が毎日コンクール入選。
1952	昭和27	東京学芸大学助教授に就任。《奥の細道》がジェノバ国際作曲コンクール入選。
1953	昭和28	東京藝術大学講師、東邦音楽短期大学講師に就任。
1955	昭和30	訳書『楽式論』（真生社）が出版される。
1960	昭和35	訳書『和声学実習手引』（真生社）が出版される。
1962	昭和37	東京学芸大学教授となる。
1964	昭和39	『和声：理論と実習』（島岡譲執筆責任、音楽之友社発行）の編集に携わる。
1965	昭和40	『芭蕉の奥の細道による気紛れなパラフレーズ』（音楽之友社）が出版される。
1976	昭和51	東京学芸大学退官、名誉教授となる。
1977	昭和52	訳書『音楽の表現形式：ブリタニカからの音楽論文集』（ドナルド・フランシス・トーヴィ著、全音楽譜出版社）が出版される。
1985	昭和61	勲三等、叙勲。
1989	平成1	『中国歴朝閨秀詩抄：女声合唱組曲』（全音楽譜出版社）が出版される。
1990	平成2	『二声対位法：基礎からフーガまで』（東京コレギウム）が出版される。
1994	平成6	ニューヨークの芭蕉没後300年祭で《奥の細道》が全曲初演される。12月7日、逝去。

<sup>3</sup> 柏木俊夫の手稿資料および「柏木俊夫 人と作品」（『柏木俊夫生誕百年記念演奏会プログラム』20～23頁）を参照した。



#### 4-1-2. 作品表

##### 作曲作品（声楽・器楽作品）

曲名	編成	作曲時期	作詞者	自筆譜の体裁、内容概要	備考
主題と変奏	ピアノ独奏	1932年	なし	「TOKYO ONGAKUSYOIN」の印字入り五線紙使用。「1932.3.21」と記入あり。	入学試験勉強用。
知らぬ旅路に夜は来りて	混声四部合唱(無伴奏)	1936年	ハイネ	27.1x19.7cm、ガリ版。	本科卒業作品。1936年3月22日初演。
秋の雲	独唱(ピアノ伴奏)	1936年	与謝野晶子	31.4x23.1cm、鉛筆書き、最後に「1936.11.29」と「作曲後感」が記入されている。	
初秋	独唱(ピアノ伴奏)	1937年	村野四郎	39.6x27.6cm、鉛筆書き、「東京音楽学校校長兼杉嘉壽氏の依頼により止むなく之を作曲す 1937.9.6」と記入あり。	
岸根のいばら	独唱(ピアノ伴奏)	1937年	木下幸文	38.7x26.9cm、鉛筆書き、最後に「1937.6.22」と記入あり。	
古式による弦楽組曲	弦楽合奏	1938年	なし	38.7x26.7cm、ペン書き。	研究科修了作品。1938年4月30日初演。
少女の歌	独唱(ピアノ伴奏)	1938年	北原白秋	31.3x23.0cm、鉛筆書き、一部破損しておりテープ補強の形跡あり。	
冬	独唱(ピアノ伴奏)	1938年	芥川龍之介	①37.6x27.0cm、鉛筆書き。②31.5x22.1cm、鉛筆書き。	
黒き花	混声四部合唱(無伴奏)	1939年	岩野泡鳴	①27.0x19.0cm、ガリ版、②27.2x19.0cm、ペン書き、表紙に「50部」とあり最後に「1939.1.5『演奏所要時間4分』演奏所要時間2分30秒位」と記入あり。③31.4x23.2cm、鉛筆書き、「最後にJan 5. 1956」「3分15秒」と記入あり。	「謹呈信時潔先生」と表紙に記入されたペン書きの清書譜は、東京藝術大学附属図書館の信時文庫に所蔵あり。
恩賜の煙草	バリトン独唱、混声四部合唱、オーケストラ、朗読	1939年	白鳥省吾作詞 (大久保福太郎作歌)	41.0x28.6cm、鉛筆書き(表紙のみペン書き)。	管絃楽、朗読、独唱、合唱。表紙に「日本放送協会の依頼に依り昭和十四年六月十六日作曲、同二十七日夜放送」とあり。
緑香花火	独唱(ピアノ伴奏)	1940年	斎藤潔	31.3x23.2cm、鉛筆書き、最後に「17.Juli.1940『音楽教育研究会よりの依頼により作曲』と記入あり。	
入り日	独唱(ピアノ伴奏)	1942年	ヴェルレーヌ詩、 立原道造訳	37.6x26.9cm、鉛筆書き、最後に「—10 Aug.1942—」とあり。	
シベリアン・チットに	独唱(ピアノ伴奏)	1942年	石河かよ子	①38.2x27.0cm、②27.7x28.0cm、製本され表紙は彩色されている。③38.0x26.9cm、鉛筆書き、 標題の後に「灰色の空と雪を眺め怒り狂ふ風の音を聞きつつ」、最後に「Nov. 15. 1942」と記入されている。 ④37.8x26.8cm、鉛筆書き、⑤37.5x26.8cm、鉛筆書き、「Nov. 15. 2602」と記入あり。	
路	独唱(ピアノ伴奏)	1943年	与謝野晶子	37.6x27.0cm、鉛筆書き、「後記」として説明文があり、最後に「1943」と記入あり。	
明日の時	独唱(ピアノ伴奏)	1943年	与謝野晶子	38.0x27.0cm、鉛筆書き、最後に「1943.10.20.1.30 P.M.」と記入あり。	
青き花	独唱(ピアノ伴奏)	1943年	北原白秋	38.1x27.0cm、鉛筆書き。	
月光	独唱(ピアノ伴奏)	1944年	深尾須磨子	①38.1x27.0cm、ペン書き、最後に「den 7. Januar 1944」と記入あり。	
彩雲	混声四部合唱(無伴奏)	1944年	蒲原有明	①27.1x19.0cm、ペン書き。②30.0x22.0cm、鉛筆書き、最後に「昭和19年春 村尾護郎君の結婚を祝ひて」と記入あり。	楽譜最後に「昭和19年春 M君の結婚を祝ひて」「演奏所要時間4分」と書き込みあり。
霧	独唱(ピアノ伴奏)	1944年	深尾須磨子	37.5x27.0cm、鉛筆書き、最後に「den 7. Januar 1944」と記入あり。	
中国歴朝蘭秀詩抄	独唱(ピアノ伴奏)	1944年	那珂秀穂訳	①37.8x27.2cm、ペン書き、後ろに文章あり。②31.0x22.4cm、ペン書きに修正書き込みあり。	
東へ行けば	独唱(ピアノ伴奏)	1947年	北原白秋	27.2x19.2cm、鉛筆書き、最後に「1947.3.20」と記入あり。	
七夕	舞踏劇(ソプラノ、児童合唱、フルート、チェロ、ピアノ)	1948年	竹俣一雄	①30.5x21.7cm、鉛筆書き、表紙に「藤間節子さんの依頼によりて」最後に「1948.10.23」と記入あり。 ②30.5x21.4cm、鉛筆書き、依頼書あり、最後に「1948.10.23」とあり。	
芭蕉の奥の細道による 気まぐれなバラフレーズ	ピアノ独奏	1949年	なし	①37.5x27.0cm、鉛筆書き、それぞれに日付あり。1947.8.31(行く春、野を)～1948.4.26(五月雨)。 ②37.4x27.1cm、ペン書きに修正あり、製本、和歌の英訳あり、「順序変更」「OK」などの書き込みもある。	
まぼろし源氏	オペラ(ソプラノ、メソソプラノ、テノール、 女声合唱、オーケストラ)	1950年	釈道空	32.2x23.3cm、表紙は色文字、その1～その4の4部から成る。その3の最後に「1950.10.5」と記入あり。	
かぐや姫	児童劇	1953年	不明	38.0x26.9cm、鉛筆書き、「I. 竹やぶのうた」の最後に「1953.1.27」、「II. おわかれ」の最後に「1953.1.25」、 歌詞記入用紙に「三年生の教科書の最後にのせる劇の曲 音域Es-C位、F dur」と記入あり。	
おしくらまんじゅう	唱歌	1953年	古関義雄	38.3x26.9cm、最後に「1953.1.15」「小学校二年生三学期用、福井直弘氏の依頼に依る」と記入あり。	
魚つり	唱歌	1953年	古関義雄	38.0x26.9cm、「1953.1.18」「福井直弘氏の依頼に依る」と記入あり。	
じゃがたら文	オペラ(ソプラノ、男声合唱、オーケストラ)	1956年	大野恵造	37.6x29.0cm、製本。	
はじらい	舞踏音楽(ピアノ伴奏)	1958年	不明	①38.0x27.2cm、鉛筆書き。②38.1x26.8cm、鉛筆書き、最後に「1958.10.25」と記入あり。	
二輪の歌	独唱(ピアノ伴奏)	1960年	深尾須磨子	①38.1x26.8cm、鉛筆書き、最後に「1960.10.16」とあり。②38.0x26.8cm、鉛筆書き。③38.0x26.8cm、表紙標題の下に「イタリヤの牧歌(その四)」とあり、最後の歌詞掲載頁に「伊太利亜の牧歌(その四)永遠の郷愁より」と記入あり。	
旅愁	独唱(ピアノ伴奏)	1960年	深尾須磨子	①38.0x26.9cm、鉛筆書き、「1960.11.27」と記入あり。②38.1x27.0cm、鉛筆書き。	
わずれなぐさ	独唱(ピアノ伴奏)	1961年	アレント、上田敏訳	不明	
熱帯魚	混声四部合唱(ピアノ伴奏)	1963年	南川周二	38.0x26.7cm、同じ体裁の自筆譜が2種類あり、片方には歌詞や旋律スケッチの書き込みがある。 最後に「1963.10.23」と記入あり。	
小金井の牧歌	混声四部合唱(ピアノ伴奏)	1965年	柏木俊夫	不明	
秋風と窓	独唱(ピアノ伴奏)	1973年	堀内幸枝	33.8x26.4cm、鉛筆書き、最後に「1973.4.10」と記入あり。	
フィンランドの雨	独唱(ピアノ伴奏)	1988年	市河かよ子	不明	
砧	独唱(ピアノ伴奏)	不明	不明	38.0x27.0cm。	
月花の舟	女声2部合唱	不明	足立幽香里	31.5x23.2cm、ペン書き。	

作曲作品（団体歌）

曲名	作詞者	制定年月日
都立市ヶ谷高等学校校歌	不明	1956年11月26日
千葉経済高等学校校歌	中山知子	1978年1月
都立羽田高等学校校歌	中山知子	不明
菊華高等学校・中学校校歌	関野武夫	不明
姫路夜間中学校校歌	井上三具	1941年8月6日
駒込中学校校歌	今関政徳	1953年7月7日
劔地中学校校歌	宮地幸一	1954年7月20日
足立区立第6中学校	今関政徳	1958年10月1日
東久留米市立大門中学校	森田重穂	1976年3月1日
飯能市立吾野中学校	岩田孝三	1978年3月11日
横浜市立山内中学校校歌	宮地幸一	不明
西尾市立平坂中学校校歌	宮地幸一	不明
上野中学校校歌	不明	不明
戸塚第二小学校校歌	深尾須磨子	1953年9月25日
葦崎小学校校歌	小池藤五郎	1954年7月3日
守山小学校校歌	宮地幸一	1958年1月14日
坂井郡兵庫小学校校歌	山本和夫	1959年11月1日
武生市國高小学校校歌	山本和夫	1961年11月5日
西尾市立矢田小学校	宮地幸一	1964年2月1日
加茂尋常・高等小学校校歌	川路柳虹	不明
金程小学校校歌	新川和江	不明
愛国行進曲	美川幸雄	1939年11月30日
必勝歌	杉江健司	1945年1月10日
金谷町の歌	町歌制定委員会（撰詞）	1958年5月3日
生穂第一小学校子供会歌	岩木躑躅	1959年9月15日
新電元工業株式会社社歌	小林英一	1959年10月20日
新宿明德幼稚園園歌	多賀家雄	1963年2月28日
増産戦士の歌	不明	不明
国際学友会学徒の歌	宮崎申郎	不明
静岡県金谷町金谷音頭	諏訪城一	不明
北里学園学生歌	長木大三	不明

著書・訳書

タイトル	出版社	出版年	備考
和声：理論と実習	音楽之友社	1964～1967	島岡譲執筆責任
音楽の表現形式：ブリタニカからの音楽論文集	全音楽譜出版社	1977. 2	D.F. トーヴィ著、柏木俊夫訳
二声対位法：基礎からフーガまで	東京コレギウム	1990. 4	柏木俊夫編

著作（雑誌）

記事名	掲載誌	掲載巻号	出版社	出版年
中学校と音楽	音楽教育	不明	大日本出版	1942.4
読者の広場 新刊書評 / 柏木俊夫；村田武雄	レコード芸術	15(7)	音楽之友社	1966. 7

#### 4-2. 渡鏡子（第1期生）

##### 4-2-1. 年譜<sup>4</sup>

西暦	元号	事項
1916	大正5	2月24日、陸軍大尉の父久雄と母園生の長女として東京に生まれる。
1932	昭和7	東京府立第五高等女学校を卒業し東京音楽学校に入学。
1936	昭和11	3月、東京音楽学校本科作曲部を第一期生として卒業。卒業演奏作品は《夜の讃歌》。4月、研究科へ進学。
1937	昭和12	『音楽』全5巻(乗杉嘉壽編)帝国書院より発行。《春過ぎて》《アルバム》《秋の通信》《日本新女性の歌》が収録される。
1938	昭和13	東京音楽学校研究科作曲部を修了。
1941	昭和16	日本ペン倶楽部書記長・夏目三郎と結婚。
(1941~1945)	(昭和16~20)	松江に疎開
1950	昭和25	唯一の室内楽作品《ピアノ三重奏曲》作曲。
1950~55	昭和25~30	「うたのじかん」などに約15曲の童謡を発表。
1954~57	昭和29~32	『音楽事典』(平凡社)の執筆・編纂。
1961	昭和36	『ドヴォルジャーク——生涯と作品』の訳書を上梓。
1963	昭和38	日本人女性として初めてブラハの春音楽祭に招かれる。
1965	昭和40	秋山龍英、山根銀二、佐藤克明らとともに『月刊音楽』を創刊。ベートーヴェン《交響曲第9番》〈歓喜に寄す〉の口語訳を発表。
1966	昭和41	『スメタナ / ドヴォルジャーク』(大音楽家 人と作品・19)刊行。
1966~72	昭和41~47	「詩と音楽の会」で4曲の歌曲を発表。
1971	昭和46	『近代日本女性史——音楽』を刊行。
1974	昭和49	11月20日、逝去。

#### 4-1-2. 作品表

##### 作曲作品

曲名	編成	作曲時期	作詞者	自筆譜の体裁、内容概要	備考
ピアノ組曲	ピアノ独奏	1933年	なし	所在不明。	習作
絃楽四重奏曲	弦楽四重奏	1933年	なし	所在不明。	習作。1楽章のみ。
春過ぎて	独唱(ピアノ伴奏)	1937年(出版年)	持統天皇	所在不明。	『音楽』第2巻所収。
アルバム	独唱(ピアノ伴奏)	1937年(出版年)	水町京子	所在不明。	『音楽』第3巻所収。
秋の通信	独唱(ピアノ伴奏)	1937年(出版年)	勝承夫	30.7x23.1cm、ペン書き。「日本現代歌曲集」提出曲と記入あり。	『音楽』第3巻所収。
日本新女性の歌	女声三部合唱(ピアノ伴奏)	1937年(出版年)	與謝野晶子	所在不明。	『音楽』第3巻所収。

<sup>4</sup> 渡鏡子の執筆文および辻浩美「渡鏡子」『女性作曲家列伝』（小林緑編、平凡社、1999年、304~308頁）を参考にした。

(続き)

曲名	編成	作曲時期	作詞者	自筆譜の体裁、内容概要	備考
病院船の歌	二部合唱(ピアノ伴奏)	1941年	西澤都弥子	31.2x23.2cm、ペン書き。“TOYOKO SHIBUYA”と印字された五線紙使用。楽譜の最後に“5. Sept. 1941.”と書き込まれている。	1941年9月5日、朝日新聞朝刊に掲載。
母上に	独唱(ピアノ伴奏)	1944年	野長瀬正夫	①31.5x21.3cm、ペン書き。F dur。表紙に“Feb. 1944”と記入あり。 ②30.7x21.7cm、ペン書き。D dur。楽譜見出しに「(Orig. F dur)」と記入あり。 ③30.3x21.4cm、ペン書き。D dur。「日本放送協会」の五線譜使用。	
わがうた	独唱(ピアノ伴奏)	1944年	北原白秋	4種類あり。①ペン書き。表紙に“Feb. 1944”とあり。②ペン書き(一部鉛筆書き)。表紙に“[Es dur]”とあり。③鉛筆書き。楽譜見出し部分に「Es-Dur わがうた(白秋詩) February 1944」とあり。④ペン書き。一部白紙。	
行方わかぬ戦死者の碑名	独唱(ピアノ伴奏)	1944年	増田晃	31.5x22.1cm、ペン書き。表紙に「(この曲を増田晃の英霊に捧ぐ) 夏目鏡子 / Sept. 1944」と書き込まれている。	
クリスマス	独唱(ピアノ伴奏)	1950年	黒崎義介	ペン書き。表紙に“Nov. 1950”と記入あり。	
わにさん	独唱(ピアノ伴奏)	1950年	津田誠	2種類あり。①31.2x21.2cm、ペン書き。表紙に“Jan. 8. 1950.”と書き込まれている。②31.0x21.7cm、ペン書き。一部空欄。	
お月夜	独唱(ピアノ伴奏)	1950年	不明	31.2x21.2cm、鉛筆書き。表紙に“Jan. 25. 1950”と記入あり。	
すずらん	独唱(ピアノ伴奏)	1950年	北原白秋	30.1x21.3cm、ペン書き。表紙に“Jan. 9. 1950.”と記入あり。	
兎の電報	独唱(ピアノ伴奏)	1950年	北原白秋	五線紙帖(30.6x21.7cm、表紙に“Music Note”の印字と“K. Natsume”の鉛筆書き)の一部。鉛筆書き、冒頭に“Feb.4.1950”と記入あり。	
七五三	独唱(ピアノ伴奏)	1950年	黒崎義介	2種類あり。①31.2x21.6cm、ペン書き。②27.3x19.2cm、ペン書き、表紙に“Oct 20. 1950”と記入あり。	
ピアノ三重奏曲	ピアノ三重奏	1950年	なし	スコア2種類。①31.2x21.3cm、ペン書き。②31.2x23.2cm、ペン書きと鉛筆書きの併用。加筆修正あり。ヴァイオリンパート譜1種類。25.5x18.2cm、鉛筆書き。紙の貼り付けによる修正あり。	
ねずみとねこ	独唱(ピアノ伴奏)	1951年	後藤福太郎	25.4x17.9cm、鉛筆書き。表紙に“16 July 1951”と記入あり。	
なかよしこよし	独唱(ピアノ伴奏)	1952年	不明	26.7x19.0cm、鉛筆書き。表紙に“May 5. 1952”と記入あり。	
祭のまへ	独唱(ピアノ伴奏)	1953年	北原白秋	2種類あり。①31.2x21.8cm、ペン書き、一部修正あり。②30.9x21.7cm、ペン書き、鉛筆で記号の書き込みあり。貼り付けによる修正あり。	
野原に寝る	独唱(ピアノ伴奏)	1953年	萩原朔太郎	3種類あり。①31.2x22.7cm、ペン書き。鉛筆で加筆修正あり。②31.2x21.5cm、ペン書き、一部鉛筆で加筆あり。③26.9x18.9cm、鉛筆書き、一部断章。	
鐘	ピアノ独奏	1955年	なし	2種あり。①31.5x21.9cm、ペン書き、注釈記入あり。②31.5x21.9cm、最後に「昭和30年1月31日」と記入あり。	
ミルクのコップに	独唱(ピアノ伴奏)	1950年代?	不明	五線紙帖(30.6x21.7cm、表紙に“Music Note”の印字と“K. Natsume”の鉛筆書き)の一部。冒頭に“Feb.17”最後に“June 24 '50”と記入あり。	
蓮の花	独唱(ピアノ伴奏)	1950年代?	不明	五線紙帖(30.6x21.7cm、表紙に“Music Note”の印字と“K. Natsume”の鉛筆書き)の一部。最後に“June 20th”と記入あり。	
およめいり	独唱(ピアノ伴奏)	1950年代?	不明	五線紙帖(30.6x21.7cm、表紙に“Music Note”の印字と“K. Natsume”の鉛筆書き)の一部。	
おたまじゃくし	独唱(ピアノ伴奏)	1950年代	不明	五線紙帖(30.6x21.7cm、表紙に“Music Note”の印字と“K. Natsume”の鉛筆書き)の一部。冒頭に“Apr.21”と記入あり。	
曲名不明	独唱(ピアノ伴奏)	1950年代?	北原白秋	五線紙帖(30.6x21.7cm、表紙に“Music Note”の印字と“K. Natsume”の鉛筆書き)の一部。	
ある日海辺で	独唱(ピアノ伴奏)	1966年	鶴見正夫	31.2x21.7cm、ペン書き。表紙に“1966 13. Oct.”と記入あり。	『新しい日本の歌』第1集所収。
ママの立ち話	独唱(ピアノ伴奏)	1968年	柴野民三	①31.2x21.7cm、ペン書き。表紙に“July 1968”と記入あり。一部紙貼り付けによる修正あり。②31.3x22.1cm、ペン書き。表紙に“July 1968”と記入あり。	『新しい日本の歌』第3集所収。
たたかひの歌	独唱(ピアノ独奏)	1969年(出版年)	原三佳	所在不明。	『新しい日本の歌』第4集所収。
モクマオウの街	独唱(ピアノ伴奏)	1972年	江間章子	31.2x21.7cm、ペン書き。表紙に“Sept. 1972”と記入あり。	『新しい日本の歌』第7集所収。
光への序詞	女声三部合唱(ピアノ伴奏)	不明	山本一	23.2x31.2cm、ペン書き。表紙に「謹みて山本一氏の英霊に捧ぐ」と記入あり。	
羊飼ひ	独唱(ピアノ伴奏)	不明	不明	31.5x21.7cm、鉛筆書き。テープ補正あり。	
挽歌	独唱(ピアノ伴奏)	不明	中井克比古	31.4x23.2cm、ペン書き。染みがあり、資料状態は良くない。	

著書・訳書

タイトル	出版社	出版年	備考
和声学(訳書)	音楽之友社	1954	L. トウイレ、R. ルイ 著、山根銀二、渡鏡子訳
シューマン	弘文堂	1955	音楽鑑賞手帖6
ドヴォルジャーク——生涯と作品(訳書)	音楽之友社	1961	O. ショウレック著、渡鏡子訳
スメタナ/ドヴォルジャーク	音楽之友社	1966	「大音楽家人と作品」19
音楽	鹿島研究所出版会	1971	「近代日本女性史」5

雑誌執筆文

記事名	掲載誌	掲載巻号	出版社	出版年	備考
混沌と機械の間(訳)	音楽	14	東京音楽学校校友会	1934.3	原文著者はA. ワイスマン
東洋音楽の起源(訳)	音楽	16	東京音楽学校校友会	1935.12	原文著者はA. ウェスタール
オーディション座談会	音楽評論	4(7)	音楽評論社	1936.5	田中正平、諸井三郎、山根銀二、箕作秋吉、伊庭孝、原太郎らを含め28人以上
新しい音楽の語法(訳)	音楽評論	6(2)	音楽評論社	1937.2	原文著者はH. メルスマン
新しい音楽の語法(訳)	音楽	17	東京音楽学校校友会	1937.3	原文著者はH. メルスマン
現代作曲家連盟第二回発表会合評	音楽評論	6(4)	音楽評論社	1937.4	原太郎、宮淳三、渡鏡子、井上頼豊、山根銀二による
資料 新しい音楽の語法(二)(訳)	音楽評論	6(4)	音楽評論社	1937.4	原文著者はH. メルスマン
「ペトルーシュカ」を語る	フィルハーモニー	11(4)	NHK交響楽団	1937.4	原文著者はA. ベノイ
ベートーヴェンの最後の交響曲(訳)	音楽評論	6(5)	音楽評論社	1937.5	原文著者はK. プリングスハイム
ベートーヴェン第三交響曲並びに第五交響曲の演奏に就いて(編訳)	音楽評論	6(6)	音楽評論社	1937.6	原文著者はF. ワインガルトナーと一條重美
二台のピアノ演奏会—ワインガルトンと井上園子	音楽評論	6(6)	音楽評論社	1937.6	
ウェーベルンとベルク	フィルハーモニー	11(6)	NHK交響楽団	1937.6	原文著者はH. メルスマン
作曲家自由討論	音楽評論	6(7)	音楽評論社	1937.7	宅孝二、清瀬保二、原太郎、和田愛生、伊藤宣二、山根銀二、大木正夫、渡鏡子、湯浅永年、園部三郎による
音楽会評 ピアストロ・トリオの感想	音楽評論	6(7)	音楽評論社	1937.7	
「楽壇紛糾録」に答へて	音楽評論	6(8)	音楽評論社	1937.8	
資料 新しい音楽の語法(三)(訳)	音楽評論	6(9)	音楽評論社	1937.9	原文著者はH. メルスマン
学生諸君への別辞	音楽	18	東京音楽学校校友会	1937.10	
教師としてのシェーンベルク(訳)	音楽研究	3(1)	共益商社書店	1937.10	原文著者はA. ウェーベルン、A. ベルク
マーラー、レーガー、シュトラウス及びシェーンベルク(作曲技術的考察)(訳)	音楽研究	3(1)	共益商社書店	1937.10	著者はE. シュタイン
ゾルタン・コダーイ(訳)	音楽研究	3(2)	共益商社書店	1938.1	著者はA. トート
ヒンデミット「作曲の手引」(一)(訳)	音楽評論	7(1)	音楽評論社	1938.1	
ヒンデミット「作曲の手引」(二)(訳)	音楽評論	7(2)	音楽評論社	1938.2	
アルトゥーロ・トスカニーニ	フィルハーモニー	12(2)	NHK交響楽団	1938.2	原文著者はH. メルスマン
ヒンデミット「作曲の手引」(三)(訳)	音楽評論	7(3)	音楽評論社	1938.3	
新旧作曲家に生活を聴く	音楽評論	7(3)	音楽評論社	1938.3	清瀬保二、大木正夫、久保田公平、安部幸明、渡鏡子、原太郎、山根銀二、園部三郎による
ヒンデミット「作曲の手引」(四)(訳)	音楽評論	7(4)	音楽評論社	1938.4	
ヒンデミット「作曲の手引」(五)(訳)	音楽評論	7(5)	音楽評論社	1938.5	
コンクール入選作曲	音楽評論	7(5)	音楽評論社	1938.5	
「第九」の演奏に関するワーグナーの言葉(一)	音楽評論	7(6)	音楽評論社	1938.6	
「第九」の演奏に関するワーグナーの言葉(二)	音楽評論	7(7)	音楽評論社	1938.7	
日本に於けるドイツ音楽(訳)	音楽研究	3(4)	共益商社書店	1938.7	

(続き)

記事名	掲載誌	掲載巻号	出版社	出版年	備考
イタリ音楽とドイツ音楽 (訳)	音楽研究	3(4)	共益商社書店	1938.7	原文著者はO. F. ペーア
1933年以來の文化建設 (訳)	音楽研究	3(4)	共益商社書店	1938.7	原文著者はR. ゴンナー
ヒンデミット「作曲の手引」(六) (訳)	音楽評論	7(8)	音楽評論社	1938.8	
ヒンデミット「作曲の手引」(七) (訳)	音楽評論	7(9)	音楽評論社	1938.9	
クオアチア音楽瞥見	フィルハーモニー	12(8)	NHK交響楽団	1938.9	原文著者はZ. ヒルシュラー
シューマンのヴァイオリン協奏曲	フィルハーモニー	12(8)	NHK交響楽団	1938.9	原文著者はW. フレイ。1938年12月の第12巻第11号に再録
ヒンデミット「作曲の手引」(八) (訳)	音楽評論	7(10)	音楽評論社	1938.10	
上野没落すべし	音楽評論	7(11)	音楽評論社	1938.11	
ヒンデミット「作曲の手引」(九) (訳)	音楽評論	7(11)	音楽評論社	1938.11	
音楽会評 原智恵子独奏会評	音楽評論	7(12)	音楽評論社	1938.12	
ヒンデミット「作曲の手引」(完) (訳)	音楽評論	7(12)	音楽評論社	1938.12	
前号「ヒンデミット『作曲の手引』についてのお断り」	音楽評論	8(1)	音楽評論社	1939.1	
ワインガルトナー賞入賞作品合評会	音楽評論	8(6)	音楽評論社	1939.6	池内友次郎、渡鏡子、山根銀二、原太郎、岩田重雄による
野邊地瓜丸独奏会	音楽評論	8(11)	音楽評論社	1939.11	
今月の現代音楽	音楽評論	9(3)	音楽評論社	1940.3	
音楽会評 マーラーを聞く——宝井真一独唱会	音楽評論	9(6)	音楽評論社	1940.6	
シュベルトをめぐって —— 楨田さんの思ひ出	音楽評論	10(3)	音楽評論社	1941.3	
新楽季の抱負を語る (質問者)	音楽評論	10(9)	音楽評論社	1941.9	原文著者はJ. ローゼンシュトック
小倉朗交響組曲	音楽公論	2(4)	音楽評論社	1942.4	
日響のマーラーを聴いて	音楽芸術	5(4)	音楽之友社	1947.6	
楽しい學生時代	音楽芸術	7(10)	音楽之友社	1949.10	
「冬の旅」と「地人会」をきいての随感	音楽芸術	8(5)	音楽之友社	1950.5	
ショパンの天才	音楽芸術	10(6)	音楽之友社	1952.6	
音楽軍人の話	音楽芸術	10(9)	音楽之友社	1952.9	
レーガー / ヒンデミット	創元音楽講座	5	東京創元社	1955.9	
ヤナチェックを中心とする東欧の音楽	フィルハーモニー	28(1)	NHK交響楽団	1956.1	
ドボルザークの器楽作品	フィルハーモニー	34(10)	NHK交響楽団	1962.11	
ドボルザークと民族的リズム	フィルハーモニー	35(6)	NHK交響楽団	1963.6	
ハンガリーと民族音楽 ハンガリーの現代音楽	音楽の友	32(5)	音楽之友社	1964.5	
座談会 コロムビア傘下に入った ストラフォン・レコードを展望する	レコード芸術	13(5)	音楽之友社	1954.5	渡鏡子、門馬直美、佐川吉男による
ドヴォルジャークのふるさと	フィルハーモニー	37(2)	NHK交響楽団	1965.2	
「売られた花嫁」とスメタナのほかのオペラ	音楽芸術	23(9)	音楽之友社	1965.9	
ヤナーチェックとマルティヌー—その民族性	音楽芸術	27(7)	音楽之友社	1969.7	
チェコの現代音楽—チェコの一流指揮者にきく	音楽芸術	29(5)	音楽之友社	1971.5	
ドヴォルジャークのピアノ作品とピアニスト・クヴァピル	ムジカノーヴァ	2(11)(12)	音楽之友社	1971.12	
特集 ロシアのピアノ音楽 座談会 チャイコフスキーからプロコフィエフまで	ムジカノーヴァ	2(11)(12)	音楽之友社	1971.12	大塚明、小林仁、渡鏡子による
〈新春鼎談〉 “川は歌う、	水登ともし	111	水登源協会	1973.1	秋山竜英、渡鏡子、丹羽雅次郎による
ドヴォルジャーク随感	フィルハーモニー	45(4)	NHK交響楽団	1973.4	
特集 ベートーヴェン 後期のピアノ曲の世界 ショパンに見るベートーヴェンの遺産——リツサの論文から	ムジカノーヴァ	4(11)	音楽之友社	1973.11	

### 4-3. 長與恵美子（第2期生）

#### 4-3-1. 年譜

西暦	元号	事項
1915	大正4	6月4日、東京で、父善郎、母茂子の長女として生まれる。
1929	昭和4	東洋英和女学院に入学。
1933	昭和8	2月、日本キリスト教団鳥居坂教会にて洗礼を受ける。3月、東洋英和女学院を卒業。 4月、東京音楽学校本科作曲部に入学。橋本國彦、信時潔、細川碧、クラウス・プリングスハイム等に師事。
1936	昭和11	第94回「学友会演奏会」にて《献詩》（ゲーテ詩、片山敏彦訳）が演奏される。
1937	昭和12	3月、東京音楽学校本科を卒業。卒業演奏の作品は《自作主題に豫るピアノ変奏曲》。4月、東京音楽学校研究科作曲部に進む。 12月、『音楽』全5巻（乗杉嘉壽編）帝国書院より発行。《雁》《てんとうむし》《さくらんぼ》《櫻》が収録される。
1938	昭和13	渡辺正と結婚
1939	昭和14	東京音楽学校研究科作曲部を修了。
1944	昭和19	神奈川県、藤野へ疎開。自身の家族と父母、妹一家とともに居を移す。
1945	昭和20	一家で鳥取県夜見ヶ浜へ疎開。
1948	昭和23	疎開先から東京へ戻る。
1950	昭和25	新設された慶應義塾女子高等学校の音楽科担当教員となる。 11月、読売ホールにて、慶應義塾高等学校、慶應義塾女子高等学校、合同で行われた、ハイドンのオラトリオ《天地創造》の全曲演奏においてピアノ伴奏を担当。
1962	昭和37	《ピアノのための組曲 琴・笛・をどり》がインターナショナル・ミュージック・パブリシャーズより出版される。
1967	昭和42	12月、東京文化会館にて「長與恵美子第1回作品発表会」が開かれる。
1969	昭和44	慶應義塾女子高等学校の「十月祭」でオペレッタ《かくれ鬼》が上演される。
1970	昭和45	『ムジカノーヴァ』に「インベンションの研究と楽しみ」が連載される。
1973	昭和48	ムジカより『J. S. Bachの二声および三声のインヴェンションの解析と説明』が出版される。
1974	昭和49	ワイマール、ライプツィヒなどドイツ各地とベルギー、イタリアを訪れる。
1987	昭和62	『ルターからバッハへの二百年——コラールのあゆんだ道』が東京音楽社より出版される。
1988	昭和63	『15曲2声インヴェンションの研究と楽しみ』『15曲シンフォニアの研究と楽しみ』が東京音楽社から出版される。
1992	平成4	日本福音ルーテル大岡山教会に転入し、会員となる。
1995	平成7	シヨバンから『15曲2声インヴェンションの研究と楽しみ』『15曲シンフォニアの研究と楽しみ』が出版される。
2009	平成21	1月13日、東京にて逝去。

#### 4-3-2. 作品表

##### 作曲作品

作詞者	自筆譜の体裁、内容概要	備考
片山敏彦訳	29.8x22.9cm。「1」「2」はペン書き、「3」「4」は鉛筆書き。他に謄写譜もあり。	1936年第94回「学友会演奏会」で演奏。 木下保指揮、東京音楽学校本科3年合唱
江南文三	不明	1937年発行の『音楽』に掲載
長田恒雄	不明	1937年発行の『音楽』に掲載
C. ロゼッティ詩、西條八十訳	不明	1937年発行の『音楽』に掲載
飯田亀代司	不明	1937年発行の『音楽』に掲載
なし	29.5x22.7cm。鉛筆書き。	ヴァリエーション9まで。主題も自作であると推定され、 1937年、東京音楽学校本科作曲部卒業時の卒業演奏 の際の作品の可能性有。
不明	31.5x22.0cm。鉛筆書き。彼岸花のようなイラストあり。	
なし	25.7x17.9cm。楽譜は鉛筆書き。最初に「1959 クリスマスの朝」とあり、最後に「E.W.」の書き込みと「恵」の押印。厚紙の表紙に貼り付けられており、表紙には花の絵と「1959 Dec. 25 E.W.」と書き込みあり。	

(続き)

曲名	編成	作曲時期	作詞者	自筆譜の体裁、内容概要	備考
ピアノのための組曲 琴・笛・をどり	ピアノ独奏	不明 (~1962年)	なし	不明	1962年、インターナショナル・ミュージック・パブリシャーズより出版。 1967年、「長与恵美子第1回作品発表会」で長与咲子が演奏。
不明	器楽	1963年	なし	不明	30小節目から最後(102小節目まで)の楽譜は確認できる。
Etude II	ピアノ独奏	1965年	なし	①30.8x21.5cm、表紙に作品名と「長与恵美子曲」の書き込み、「恵」の押印あり。 International Music Publishers co., Ltd.の五線紙使用。鉛筆書き。	
似呂波仁保遍登	混声四部合唱	1965年頃	不明(国歌)	①38.9x21.4cm。楽譜は鉛筆書きだが、表紙に赤鉛筆で「信時潔先生の御遺霊に捧ぐ」「恵ノ長与恵美子作曲」[70部]とあり、鉛筆で「10/5納」「紙一白」「東京 バロックコーラス」などの書き込みあり。②31.3x23.2cm。五線ノートに鉛筆書き。 一部スケッチのような部分もあり。	1967年「長与恵美子第1回作品発表会」で演奏。楽譜に「信時潔 先生の御慰霊に捧ぐ」の表記あり。1929年信時が作曲した(いろは うた)を参照し、信時の死に際し作られたもの。
春はあけぼの	オーボエ、ハープ、マリンバ、 弦楽合奏	1967年	なし	31.1x22.8cm。122小節目まで鉛筆書き、123小節目から最後の300小節目まで ペン書き。末尾に“July 8th 1967 Emiko Nagayo”と記入されている。	1967年、「長与恵美子第1回作品発表会」で小島庸子(オーボエ)、 野沢久子(ハープ)、原忠子(マリンバ)、岡見温彦(指揮)が演奏。
源氏物語による二つの小曲 (1)風に鳴る琴(2)絵巻の笛	ハープ独奏曲	不明 (~1967年)	なし	不明	1967年、「長与恵美子第1回作品発表会」で原野万里子が演奏。
流れ	ハープ独奏曲	不明 (~1967年)	なし	不明	1967年、「長与恵美子第1回作品発表会」で篠崎史子が演奏。
かぜ	ハープ独奏	不明 (~1967年)	なし	31.8x21.5cm。鉛筆書き。	冒頭から20小節目までの楽譜しか確認できないが、1967年の作品 発表会で奏された、ハープ独奏曲《源氏物語による二つの小品(一) 風に鳴る琴(二)絵巻の笛》の一部と考えられる。
かくれ鬼	オペレッタ (ピアノ、フルート、アイリッシュ ハープ、ヴァイオリン、ヴィオラ)	1969年	谷口陽子	(自筆譜コピーのみ)	
日本風練習曲	アイリッシュハープ合奏	1971年	なし	31.0x21.8cm。鉛筆書き。未完。	
日本よう	ハープ独奏曲?	1978年	なし	31.0x21.8cm。鉛筆書きの草稿譜とみられる。最後に“Jan. 16 1978”と記入あり。	
春の歌	合唱、カステネット、ピアノ	不明	フラウニング(上田敏訳)	25.2x17.8cm。謄写譜。表紙に“HARUNO Uta” “Composed by Emiko Watanabe” という文字と月下の五重塔のイラストあり。	
ゆりかごの夢	女声三部合唱 (ソプラノI、II、アルト)	不明	長与恵美子	27.0x19.5cm。鉛筆書き。	
女声合唱 1. み山おろしの 2. けはしき山の3. 鉢坊主	女声合唱 (1:二部合唱、2・3:三部合唱)	不明	良寛	24.8x17.6cm。謄写版。表紙に「東京バロックコーラス」とあり。	1967年「長与恵美子第1回作品発表会」で演奏。
手毬つきつつ	独唱	不明	良寛	(自筆譜コピーのみ)	1967年「長与恵美子第1回作品発表会」で演奏。
丘	独唱	不明	野本栄四郎	(自筆譜コピーのみ)	1967年「長与恵美子第1回作品発表会」で演奏。
石のほとけ	独唱	不明	長田恒雄	不明	1967年「長与恵美子第1回作品発表会」で演奏。
びわものがたり(今昔物語より) 繚詩曲	独唱	不明	長与恵美子	25.0x17.8cm。謄写譜。	1967年「長与恵美子第1回作品発表会」で演奏。
チェロとピアノのための即興曲 (みやまおろしの)	チェロ、ピアノ	不明	なし	(頁が貼りついているため、開くことができない)	東京藝術大学附属図書館の信時文庫に所蔵あり。請求記号は 「信時文庫ノ貴重楽譜ノ1013」。
für 4 Händen	ピアノ連弾(四手のための ピアノ曲)	1960年	なし	31.7x21.7cm。表紙に“N. Nagayo 1960 May 21th”と書き込みあり。 International Music Publishers co., Ltd.の五線紙使用。ペン書き。	1969年、慶應義塾女子高等学校「十月祭」で上演。
Etude I 唐子人形	ピアノ独奏	不明	なし	(自筆譜コピーのみ)	1959年に作曲された、無題のピアノ曲と同様の旋律。



著書・訳書

タイトル	出版社	出版年	備考
コラールの歩んだ道——ルターからバッハへの二百年	東京音楽社	1987年	
15曲2声インヴェンションの研究と楽しみ	東京音楽社	1988年	1970年から『ムジカノーヴァ』に連載していた文章を再編したものだ。
15曲シンフォニアの研究と楽しみ	東京音楽社	1988年	

雑誌執筆文

記事名	掲載誌	掲載巻号	出版社	出版時期	備考
ペンペン草抄	音楽	17	東京音楽学校校友会雑誌部	1937	
音楽に酔ふ	楽想	1	大丸出版社	1948.5	『楽想』は藤原義江編集雑誌
ショパンとポトツカ夫人の恋	音楽界	4(5)	川田書房	1949.6	
「子供の情景」について思うこと	楽友	2	慶應義塾高等学校	1951.8	慶應義塾女子高等学校楽友会刊行誌への寄稿文
合宿のスナップ	楽友	3	慶應義塾高等学校	1953.11	慶應義塾女子高等学校楽友会刊行誌への寄稿文
楽友会10周年を迎えて	楽友	18	慶應義塾高等学校	1961.11	慶應義塾女子高等学校楽友会刊行誌への寄稿文
竹澤先生のころ	アテネウム	14	アテネウム社	1967.10	
一秒の空間	三田評論	670	慶應大学出版会	1968.4	
或る老婦人へのモネへの追憶	心	23(7)	平凡社	1970	
回顧20年	不明	不明	不明	1971	
風巻景次郎氏と父長と善郎のこと	日本文学	21(3)	日本文学協会	1972.3	
東ドイツの旅1	心	28(3)	平凡社	1975.3	
東ドイツの旅2	心	28(4)	平凡社	1975.4	
ブリュージュ紀行	不明	不明	不明	1975	
武者小路さんをお悼みして	心(武者小路実篤追悼号)	29(7)	平凡社	1976.7	
岸田さんとの思い出	図書(岸田劉生特集号)	356	岩波書店	1979	
岸田さんのこと	現代の目(MOMAT)	293	東京国立近代美術館	1979.4	
富本家、長與家の交流の思い出	青春	16	青春芸術村『青春』出版部	1992.10	
思い出	東光会会報	不明	東洋英和女学院	不明	
シューマンの評論「作品2」に就いて	不明	不明	不明	不明	
ポリフォニーの発達	不明	不明	不明	不明	